



赤池 学

Akaike Manabu

[ユニバーサルデザイン総合研究所 所長
一般社団法人CSV開発機構 理事長]

地域の公益と事業益を両立させる
ユニバーサルデザイン

CONTENTS

特集：地域の公益性とユニバーサルデザイン

SPECIAL INTERVIEW	
赤池 学 氏	1
SPECIAL EDITION	
桜美林ガーデンヒルズ	5
只越復興住宅	9
シエリア湘南辻堂	11
アーデントクレイル山の田本町	13
ザ・ロイヤル小町	15
LA・CREA 京都御苑北	17
TOPICS	
成田空港第2旅客ターミナル	19
HOUSING IS CULTURE	
旧青木家那須別邸	21

*本誌では略称を用いています。また、一部敬称は略させていただきます。
表紙写真：桜美林ガーデンヒルズ

自然界に学ぶデザインを

— 当初は生物学を専攻されていたと伺っています。

僕は東京大田区大森の生まれ。町工場が集積した地域で、小さな工場の職人さんたちからものづくりを教わり、育ちました。このため、ものづくりが大好きです。大学受験の頃は「21世紀はバイオの時代だ」という潮流があり、大学と最初の大学院までは生物学を専攻しました。昆虫発生学の形態形成分野の研究をしていましたが、大学院時代に登場したDNAの記号論に疑問を抱くようになりました。卵から発生する幼虫や変態などを観察しており、本来ものづくりが好きだったこともあって、生物のデザインを人工物の設計やものづくりにつなげる仕事ができないかと考え、大学院で生物学から転学。デザインや美学、工学設計を学び、それが商品開発や施設・地域開発を手がける、インダストリアル・デザイナーという現在の仕事に結びついています。

*撮影場所：パナソニックリビングショールーム 東京

バリアフリーからユニバーサルデザインへ

— ユニバーサルデザインの重要性に気づかれたのはいつですか。1998年に名古屋デザイン博が開催され、そのシンポジウムでプロダクト・デザイナーのパトリア・ムーアさんが講演されました。彼女は20代に老婆に変装して米国やカナダを3年間旅行し、高齢者の課題を抽出する実験を試み、バリアフリーデザインを提唱された方です。学びを請いに楽屋に相談に行ったところ、バリアフリーデザインを進化させたユニバーサルデザインを学ぶべきだと、ノースカロライナ州立大学の建築家「ユニバーサルデザインの父」と呼ばれるロナルド・メイス先生を紹介されました。そこで、日本での科学ジャーナリストの仕事調整して時間をつくりながら、ノースカロライナ大学に通ってユニバーサルデザインの手法論を学んだのです。そして1996年に現在のユニバーサルデザイン総合研究所を立ち上げました。僕にとってユニバーサルデザインの生みの親はメイス先生ですが、育ての親はパナソニックや自動車メーカーなのです。研究所を設立した頃、パナソニックもユニバーサルデザインに対して高い問題意識を持たれていました。グループ内のデザインを戦略化しようとされていた時期で、家電製品におけるユニバーサルデザインの具体的な手法論や戦略を立て、そのパイロットモデルとしての斜めドラム式洗濯機の開発プロジェクトにもメンバーとして加わりました。

"Design for all"の"all"とは誰か

— 先生にとってのデザインとは何でしょうか。現在もさまざまな大学で、学生たちには「デザインというのは、構想と構築と構成だ」と教えています。新しい何か、これまでになかった価値あるもの、ユニークなこと、それを構想していくことがデザインの始発駅です。それを次の段階で構造やコストの制約を含めて構築し、最後に高い意匠レベルで構成をかける…これがデザインの基本だと思っています。ですから、デザインにとって一番大切なのは、最初の構想力なのです。その時に僕が重要視しているのは、ロナルド・メイス先生に教わった「ユニバーサルデザインを形にする時に一番大切なのは、デザイン・フォー・オール」というコンセプトです。みんなのためのデザイン。メイス先生が強く訴えたのは、「このオールをどのレベルでとらえるかによって、ユニバーサルデザインの社会的な意義が異なってくる」という点です。よく一般的に理解されるユニバーサルデザインとは、障害を持たれた方をはじめ高齢者や子どもたちも含めた皆が使いやすいものづくりや暮らしやすいまちづくりと考えられていますが、そこでのオールは、あくまでも多様なユーザーです。メイス先生が伝えたかったのは、ユーザーを超えた、それ以外のステークホルダーや社会までをも含めてオールと捉えるべきということ。ユーザーの範囲を超えて社会的な価値を創れと訴えられていたと思うのです。

公益と事業益がなければ生き延びることはできない

— 社会的な価値がより求められるということですか。最近取り組んでいるのはCSV(Creating Shared Value =共有価値)の創造です。2011年にマイケル・ポッター教授が、これからの企業はこのCSVという公益と事業益を両立させる投資活動なしには持続できないという提言をされました。これはメイス先生が言うデザイン・フォー・オールの考え方と極めて似通った概念です。企業活動はビジネスなので事業益を形にしなければいけません、それだけではなく、ビジネスそのものをより公益性の高いものにする必要があります。このため、2014年に一般社団法人CSV開発機構を設立しました。現在、異業種企業が36社参加されていますが、各企業が中核となる強みを強化しつつ、事業益を確保しながら、高い公益性を持つビジネスを構築するという課題にとともに取り組んでいます。CSVには3つの手法論があります。1つは商品開発におけるCSVです。環境性能の極めて高い住宅や、ハイブリッドカーなど、商品そのものに高い環境貢献性を持たせる、そのような商品や関連技術を開発することです。2つ目はバリューチェーンのCSV。例えば食品会社のケースなら、原材料を海外調達している場合は生産者を医療や教育面から支援して生活の質を向上させ、良質な原材料を安定的に持続可能に確保する。これにより、実際の商品のサステナビリティを上げていく。そうすれば、生産者を支援することがすなわち、自社のビジネスのバリューチェーンを強化することにつながります。これは間違いなく事業益の確保にもつながってきます。3つ目は、競争基盤のCSVです。企業にとってもっとも重要な競争基盤は社員の皆さんです。例えば社内のエンジニアやデザイナーをそれぞれの事業所がある周辺の学校に派遣し、出前事業などを行って地域とつないでいく。それにより従業員のモチベーションも高くなり、次世代を担う子供たちをものづくり教育で育成することができます。このような社会性の高いCSV事業を進めるべきなのです。



赤池 学氏
1958年東京都生まれ。1981年筑波大学生物学類卒業。社会システムデザインを行うシンクタンクを営み、ソーシャルイノベーションを促す、環境・福祉対応の商品・施設・地域開発を手がける。「生命地域主義」「千年持続学」「自然に学ぶものづくり」を提唱し、地域の資源、技術、人材を活用した数多くのものづくりプロジェクトにも参画。科学技術ジャーナリストとして、製造業技術、科学哲学分野を中心とした執筆、評論、講演活動にも取り組み、2011年より社団法人環境共創イニシアチブの代表理事も務める。グッドデザイン賞金賞、JAPAN SHOP SYSTEM AWARD最優秀賞、KU/KAN賞2011など、産業デザインの分野で数多く顕彰を受けている。経済産業省、総務省、国土交通省、内閣府の各種調査会・研究会の座長や委員などを歴任、長年国のエネルギー政策づくりに深く関わる。

国産材の活用による林業自治体の再生

— CSVについてももう少し詳しくお聞かせください。商品開発のCSVによって、高効率な設備やHEMSなどの技術でネット・ゼロ・エネルギー住宅が実現されていますが、それは環境貢献性の高い住宅です。その際に、積極的に国産材や地域材を使うべきなのです。パナソニックは天然木を熱処理で着色するウッドアートテクノロジーを開発し、床材などに商品化されています。現在は、ゼネコンが木造非住宅や木質マンションの施工技術の研究開発を進め、躯体もCLT※を用いたり、鉄骨と木材をシステムモジュール化する技術も進んでいます。また、スマートハウスはプラスウェルネスの時代を迎え、住まい手にとって身体や心の健康性も向上する住宅の内装材として、調湿性が高く感染症の罹患率を抑える木材が見直されています。これら木材を利用した製品の販売が伸びれば、国内林業に関わるステークホルダーや林業地域を間違いなく潤していきます。林業自治体に持続可能な雇用を創ることは、大きな公益性があると思っています。ですから、林野庁の事業も、さまざまな審議会・検討会の委員という立場でアドバイスをしてきました。これまで、大規模な木工団地やスーパー林道が整備されてきました。もちろんそれは意義のあることですが、国産材を使わせるためには、商流の末端にインセンティブをつけて、さまざまな企業が国産材を使う流れをデザインすべきなのです。この目的に沿って、木材活用の先導的な実践を検証するウッドデザイン賞が昨年から設けられました。昨年のウッドデザイン賞グランプリを受賞した岡山県の西栗倉村は、大手マンションデベロッパーと連携されています。また、生活用品メーカーやオフィス什器メーカーとの協業で地元材を用いた製品開発をされています。すると、民間企業の商流を通じてその自治体の木製品や建材が売れるのです。林業地域にしてみると、プロのビジネスモデルやデザイン力を習得できるわけです。このように、民間のCSV戦略を産地に紐づけながら、共栄関係を築いていくのが、これからの企業におけるユニバーサルデザインビジネスだと思っています。

環境性能が高く「感性価値」も高い住宅

— 日本のものづくりに求められているのは何でしょうか。日本のものづくりは、これまでハードウエアという技術とそれを展開するソフトウェアが中心でした。しかし、機能と品質だけでは国際競争力がなく、新興国との消耗戦になってしまいます。そこで、心と五感を触発する価値がこれからのものづくりに重要だと提起したのが「センスウエア」という考え方です。これを経産省が「感性価値」と名付けてくれました。これは「公益品質(ソーシャルウエア)」にもつながるものです。例えば住宅であれば、すばらしい省エネ技術や建材の「技術」、自然光や風を取り入れ、緑豊かな庭など「自然」の恩恵を享受する。それを「デザイン」によって多様な楽しさや暮らし方など、ユーザビリティに広げていく、これら3つの要素を掛け合わせることで、これからの住まいのあるべき姿が探れると思っています。具体的には南側に庭を配置して、その面を大開口とする。そこにアイランド型キッチンを置いて、リビングは、ユニバーサルで多目的利用が可能なスタジオのようなスペースにする。そうすれば、親子や仲間がそこに集い、南側の庭を見ながら皆で楽しく料理したりパーティーができるわけです。多くのハウスメーカーのユーザー嗜好調査をお手伝いしていますが、庭を眺めながらパーティーができるキッチンや、庭が望める浴室は、高い関心を集めているのです。

事業性と公益性が両立した持続するまちづくり

— 感性価値の高いまちとはどのようなものでしょうか。日本でのまちづくりは、いまだに中央に大規模商業施設を集積して、全国同じような街区が形成されているのですが、米国では伝統回帰的なコンパクトなまちづくり、ニューアーバニズムの考え方に沿った都市計画が多く見られます。そこでは、再開発のオフィスビルを建てた時でも企業のオフィスだけではなく、アンテナショップや住居、地元大学のドミトリーなど、さまざまな機能を混合して組み込んでいます。それによって賑わいをあらかじめ創出できるように計画しています。一般住宅も1階を小さなショップにするなど、生活を楽しんでいます。日本でも、リブワークスタジオのように使えるようなハウジングモデルを考えれば、もっと楽しいまちになると思います。まちづくりにも、事業性と公益性をいかに両立させるかというCSV戦略が入ってくると、公園が望める場所は感性価値が高いので、それにあった分譲価格が設定できたり、まちの資産価値を高めるために公園や街路を整備しようという考えになるでしょう。そうなれば、人が集う場所にはチャームなカフェやレストランも建ち、好循環します。このようなCSV的な発想で都市開発も進んでいけばと思っています。

— ありがとうございます。

※CLT(クロス・ラミネーテッド・ティンバー):引板の繊維方向を直交させ積層接着したパネル。厚みがあり構造材としての利用も期待されている。